

# 「底が突き抜けた」時代の歩き方 278

## 同時中枢テロが作家に問いつづけていること

辻仁成の小説『君と僕のあいだにある』（『新潮』01・11）について、作家の高橋源一郎が『小説トリッパー』（01・冬季号）のなかで、『つまらない、滑稽な小説です。しかし、それ故にこそ、わたしは、この小説が素晴らしいと思ったのです。』と独特な言い回しで評価している。この小説の素晴らしい点は、『「事件」が起こった後、すぐに書かれたこと』であり、『小説であったこと』の二つであるとして、次のように説く。

《あの「事件」の後の発言や書かれたものを、わたしは読んだり聞いたりしました。作家と呼ばれる人の多くが、少し時間がたってから、コメントやエッセーの形で、自分の「意見」を発表していました。そして、それらは、それぞれに、なかなか説得力があったり、雄弁であったり、真剣であるように見えました。

だが、なぜ、それは小説の形でなされなかったのでしょうか。思うに、それは、作家というものが、間違っただけをいったり書いたりすることを恐れているからです。

もっと正確にいうと、間違っただけ、妙なことを、いったり書いたりしているように見えるのを、恐れているからです。

軍事や政治の評論家や、木村太郎や、政治家や、ジャーナリストといった人たちの多くが、「事件」の最初の日から、テレビに出て、正しそうなことや、おかしなことを、自信たっぷりに、あるいは、いくぶんかの留保をこめて発言したり、書いたりしていました。

それらは、彼らが、ことばというもので、なにか現実について正確に表現できているからです。

それにひきかえ、作家というものは、本能的に、ことばというものがおそろしく不正確なものであることを知っているので、時間稼ぎをしようと思い、それから、いろいろな角度から見ても、非難されることが少なく、しかし同時に、一般の世論とは少しちがうなにかを考えて発表したのです。

だが、作家というものは、とりわけ、小説家というものは、小説という形でことばを使うことを専門としているはずです。だから、ほんとうは、彼らの考えを正確にいい表そうとするなら、小説の形ですべきだったのです。あるいは、小説の形でしたい、そ

うでなければ不正確になるから、というべきだったのです。それもできるだけ早く、小説以外の形でものを考えた結果、それを小説の形で表すといった、曖昧な方法ではなく、小説という形のことばで考えるということをするべきだったのです。

しかし、わたしも含めて、ほとんどの作家はそれをしませんでした。》

辻仁成という作家は、「つまらない、滑稽な小説」を書いたけれども、「事件」について「小説の形で表す」という、作家であれば当然の方法で向き合ったから、「素晴らしい」と高橋氏は強調しているように読めるかもしれないが、けっしてそうではない。「つまらない、滑稽な小説」であるから駄目なのではなく、「素晴らしい」のである。高橋氏はここでは、辻仁成という作家は「事件」を「小説の形」にしたとしかまだいっていない。どうして「つまらない、滑稽な小説」が「素晴らしい」のか。

《辻仁成は、目の前のテレビの画面の中に「テロ」の映像を発見して、ただちに小説の形にしてなにかをいおうとしました。その結果としてわかったのは、滑稽なことしかいえない、ということです。あるいは、なにをいったらいいのかわからない、ということです。

そして、それはきわめて、正しい発見だったのだ、とわたしは思います。

つまり、辻仁成という人は、なにかを正確にいおうとして、いえなかったのですが、それは彼に作家としての能力が欠けていたというより、そもそも彼が選んだ対象が、正確になにかをいえるようなものではなかった、少なくとも、その時点の彼にとって、そういう対象ではなかった、ということなのです。

わたしは、このことを、なにかを書く、とか、なにかを考える、という時に、もっとも重要なことのひとつだと思っています。

うまい小説を書く、とか、素晴らしい詩を書く、とか、そんなことより遙かに重要なことなのだ、とわたしは思います。》

日本の作家が「事件」について「小説の形」にしなかったのは、というより、できなかったのは、「事件」について「間違ったこと、妙なことを、いったり書いたりしているように見えるのを、恐れているから」だ。では、どうして「事件」について、「間違ったこと、妙なことを、いったり書いたりしているように見え」てしまうのか。それは、恋愛や SF やミステリーが得意な作家たちにとって、「事件」は彼らの得意な分野の中に収まるものではなかったからだ。つまり、「事件」は、日本の作家たちが書き慣れている主題からはみ出していたということである。《ほとんどあらゆる作家にとって書きにくい、というか、得意ではない、といった事柄があって、それがたとえば、いまの日本では「テロ」といったことばに関することなのだ、ということなのです。》と高橋氏は指摘する。

作家がそれぞれ得意分野で活躍しているように、我々のような作家でない者たちもま

た、自分に得意の守備範囲で世の中を渡っているということだ。だから高橋氏は「テロ」によって、《作家たちのことが、作家たちが置かれている状態が、つまり、わたしたちがどんな状況に置かれているかがわかる》と、どうしてもいわざるをえなくなっている。学者やジャーナリスト以外の作家や作家でない一般人の誰に対しても、「テロ」はどうにも語りにくい問題を突きつけたということなのだ。もちろん、語りにくいのは「テロ」だけではない。「テロ」以外にも膨大な領域が広がっている筈だ。問題は「テロ」を含む語りにくい膨大な領域があるだけでなく、なぜ語りにくい領域が膨大に拡大しつつあるか、というところにあるにちがいない。

それは作家も、作家でない人々も、それぞれの自分にとって「わかる」範囲内でしか動こうとしないからであり、自分の「わかる」範囲の外に出て行こうとしなくなったからである。高橋氏は自分の「わかる」範囲の外にある領域を「他人」という言葉を使って、《わたしは「他人」のことがわかるのではなく、「他人」が使っていることばがわかるだけなのです。そして、そのことばがわかるという事実を通して、なんとなく「他人」のことがわかっているような気がしているだけなのです。》もちろん、本当には「他人」が使っている言葉もわかっていないのである。

《そう、だから、多くの人間にとって「テロ」とは「他人」のようなものではないでしょうか。「恋愛」や「内面」や「波瀾万丈の物語」のようなものなら、なんとなくわかる。それは、「他人」ではなく、なんとなく知っているなにかです。そして、知っているなにかについてなら、わたしたちは、いくらでもことばをくりだせます。しかし、「他人」についてはどうでしょう。》自分たちのわからない領域、つまり、自分たちの言葉や文法では通じにくい「他人」の領域から発射されている「テロ」という意味合いで、高橋氏は考えているのだろうが、少なくとも今回の「テロ」については、日本人である我々にはそう簡単ではないし、客観的に「テロ」=「他人」とみなすことも難しい。なぜなら、そこには日本の戦後社会における内閉していく捩れの構造が貫いているからだ。

吉本隆明と対談（『群像』02・1）している加藤典洋が、「今度のテロは、テロとして見ると量的にはとにかく質的には別に新しいものはない。テロの歴史でいうと、新しい質を示したのはむしろ1995年3月に東京で起こったカルトによる無差別テロであって、今度のテロはそれを継いでいる」と、フランスの『ル・モンド』にテロの専門家が書いているのを引き継いで、「改めて振り返ってみると、今度のテロ事件の三要素は、まず特攻、組織化された自殺攻撃ですが、これは世界史的に言えば、日本の発明。次に自爆テロも現在のイスラムの自爆テロは1972年の日本赤軍によるロッド空港襲撃事件に学んだと言われているから日本発。で、今度の完全乗客道づれの無差別テロもそうだとすると、三つの要素全部、20世紀の日本発だとなる」といい、「そしてその三要素は、95年に実はもう日本に要素としては出揃っていた。」とみなしている点を、

高橋氏のいう「テロ」＝「他人」という考えのなかに射し込んでみたい。

今回の自爆テロが日本のいくつかの発明の上に成り立っている、という加藤典洋の指摘を受け入れて考えると、今回の「テロ」は少なくとも日本人にとっては、「他人」どころではなく、「自分自身」であるにもかかわらず、「他人」の如く扱っているという捩れた構造がそこに浮かび上がってくる。それは、《自分の書いたものを読み直してみると、まるで他人の書いたもののような気がする時があります。それは、歓迎すべきことだと思います。なぜなら、我々は、いつでも他人が考えるように考えるべきだからです。》と高橋氏書いていることと、全く、似て非なることである。高橋氏の言い分には、自分をどこまで「他人」とすることができるかという発想が貫かれているけれども、今回の「テロ」を「他人」とみなすそこには、自分をどこまで膨らませていっても、遂に「テロ」に触れることはできないという、自分がかかわることの不可能な「他人」しか取り出せない。

了解不可能な関係にあるからこそ、自分が「自分」の枠組みから一步ずつ踏み外していく度合いで「他人」との距離をたえず測定する配慮が、自分を「他人」としていく考えのなかに溢れ返っているのに対して、了解不可能な関係は了解不可能な関係として避けるほかない「他人」とみなすとき、その行きつく先は自分が自分に対して「他人」となっていく場所にほかならない。では、どこがどう異なるのか。自分が自分でありながら「他人」となっていく方向と、自分がもはや自分でなくなることによって「他人」となっていく方向との違いである。一方には、自分を「他人」としていくことの自覚が隔々にまで浸透しているのに対し、他方には、自分が自分に対して「他人」となっていくことの自覚がますます磨滅しつつあるのが感じられる。

もう少しわかりやすくいえば、たぶんこんな感じだ。「他人」という鏡に映っている自分に出会い、その自分を何度でも修正していきたいという欲求に駆られるか、それとも「他人」という鏡に映し出された自分になど出会いたくないし、関心もないかのいずれかであろう。「他人」の鏡に映っている自分もまた、紛れもなくもう一人の自分であると考えるか、それとも、「他人」の鏡の中の自分など本当の自分ではないし、「他人」に勝手に思い込まれたイメージにしかすぎないと思うかだ。この二様の考えを引き延ばすと、一つは「他人」とはもう一人の自分であるという考えに行きつくし、もう一つは「他人」なんてどこまでいっても「他人」で、自分にかかわりのない領域になることによって、「テロ」が永続的に繰り返されていく。

高橋氏が、「多くの人間にとって『テロ』とは『他人』のようなものではない」といふとき、「テロ」もまた、「他人」のように自分とかわりのない領域、あるいは問題となってしまうということだ。だが、先の加藤典洋の発言を踏まえるなら、日本人にとって「テロ」はけっして「他人」ではなく、自分そのものであったことに気づく

筈である。つまり、日本人にとって「『テロ』とは『他人』のようなもの」ではけっしてなく、自分そのものである「テロ」を、日本人は遠くの「他人」として取り扱うようになってしまった、といわざるをえなくなる。「テロ」について「なんとなく知っているなにか」であるにもかかわらず、なんにも知らないかのように振る舞っているのである。本当は自分のこととしてどこまでも内省しなければならないのに、自分たちの知らない「他人」がとんでもない、訳の分からないことを仕出かしたと無意識的に自ら思い込もうとしているかのようなのだ。

「テロ」と「他人」を直結させて考えようとする高橋氏の手つきが、「テロ」に対する日本人の屈折にまで踏み込んでいないという問題点が浮かび上がってくるけれども、しかし辻仁成の小説に触れて、高橋氏が作家としてけっして避けてはならない急所を鋭く衝こうとしている点は、いうまでもなく明快である。

《辻仁成のような人は、「テロ」の映像に驚き、その「テロ」というものについて、たとえば「恋愛」のように、なにかを書けるかもしれないと思って、書いてみたのです。しかし、それは、いわば彼にとって「他人」であり、「他人」について書くことばをじつは我々の誰も持っていないことに、彼は、書きながら、気づかされたのです。

では、もし、我々の誰も「他人」について書き記すことばを持っていないとしたら、我々は早々にそれを諦め、書こうとなどしない方がいいのでしょうか。》

《しかし、わたしの考えでは、作家というものは、知らないこと、うまくいえる術がないことについてこそ、なにかをいうべきなのです。誰よりも早く、間違ったことをいう、それ以上に作家にふさわしい行いはないのではないかとわたしは思ったのです。なぜなら、知らないこととは要するに「他人」であり、「他人」を知ること以上に、ことばを使ってなにかをする意味のあることなど、ないのではないかとわたしは思っているからです。》

そして、《わたしたちは「テロ」とどう向き合うべきなのか。》という問いを發して、《少なくとも作家にとって、なにかと向き合う方法はたった一つしかありません。それは、そのなにかを、文章表現（エクリチュール）の中に生きさせることです。そして、それは、いかなる場合にも、作家がとりうる唯一の行為なのです。》と締め括る。この考えかたでいえば、辻仁成……以外の日本のどの作家も、「テロ」という「他人」の前で作家であることはできなかったということだ。この指摘は、物を書くすべての人間にとって重要であるが、「テロ」という「他人」についての高橋氏の考えかたに更に補足しておきたい点は、その「他人」は「テロ」がそうであるように、突然不意にやってくるということである。だから、単に「知らないこと」だけでなく、その「知らないこと」はこちらが態勢を整える間もなく、不意を襲ってくるのだ。普段から考えていて準備できている事柄ではなく、向こうから全く予期していない事柄が突然やってくることに対

して、物を書く人間はどうことばを向き合わせていくか、という重要な問題が根底に横たわっていることは間違いない。

さて、辻仁成の小説に対する高橋氏の評価について触れておかななくてはならない。この小説は「滑稽な小説」であるかもしれないが、高橋氏のいうように、けっして「つまらない」小説ではない。反語的な意味あいを含ませていたとしても、「つまらない」という評価はそぐわないと思う。高橋氏もまた、この小説を要約して、ボートに乗ると、《美しい風景が広がっている。「私」はなぜか感動して、誰かに携帯で電話しようとするのですが、いったい誰にかけていいのかわからない。そんな風に、その小説は終わります。つまらない、滑稽な小説です。》というのだが、小説ではなく、彼の読みそのものが「つまらない」読みかたであるような気がする。

その読みには、小説の中の「私」がアメリカに行こうとして北海道に来てしまい、公園の池のボートで真ん中まで漕いだとき、「ここに来なければ絶対に気がつかなかった風景」があることを発見したことや、その発見の感動を伝える最も身近な存在（妻や息子）を自分がいま見失いつつあることや、たった一人ぼっちである自分に気づき、大事な人を探しつづける自分の姿を思い浮かべたとき、倒壊した世界貿易センタービルの瓦礫の中を写真を掲げながら息子を探しつづける老人の映像がダブってきたことや、「空に向かって祈る自分」の幻を見出して池の真ん中で泣いている自分を、太陽や山や木や風……の景色がそっと覗いてくれるように感じられたことなどが、深く収められていないのである。自分が風景に気づいたとき、風景のほうも自分に気づいたというところにまで降りて行かなければ、確かに「つまらない、滑稽な小説」でしかないだろう。

一つの小説をめぐるいろいろな読みかたがあり、したがって評価もさまざまであるが、どうして高橋氏と私とでは評価がこんなに違うのか。それは、読みの力点が異なるからだ。辻仁成は「恋愛」について書くように、「テロ」について書こうとしたが、当然のことながら書けなかった、そのことがこの作品のなかに浮き彫りにされている。高橋氏の読みは、そういうことだ。そのような読みにしたがって、要約も《結局のところ、「私」は、映像の前でアホみたいに「凄い」と唸るきりで、他にどんな感想も浮かんでこない》という姿に力点が置かれる。もちろん、私の読みはそうではない。

準備周到に練られた挙句、相当の決意を持って離婚という妻からの奇襲攻撃が「私」にむかって行われたほぼ同時刻に、遠いアメリカのニューヨークでも世界貿易センタービルにむかって自爆テロの奇襲攻撃が行われていたというように、突然の妻からの離婚の宣告と、突然の自爆テロの突撃との重なりに力点を置いて、私は読もうとする。「恋愛」について書くようには「テロ」について書けないということは、作者には織り込み済みであったと思う。私生活で女優の南果歩との離婚経験を持つ作者にしてみれば（そういえば、高橋氏も何度かの離婚を繰り返していた筈だが）、自爆テロのような奇襲攻

撃は家族の中でも、再三異なるかたちをとって起こりうるという認識を持っていたにちがいない。おそらくテレビに映し出される映像についてなにかをいおうとするなら、「恋愛」についていうようにではなく、自分にとって自爆テロ攻撃に等しかった離婚の問題を通して迫ろうとしたにちがいない。つまり、自分たちのかかわらない遠くの衝撃的な出来事に少しでも接近しようとするなら、自分たちが生活の中で経験してきている、その衝撃に少しでも重ね合わすことのできる個人的な出来事を通じて接近する以外にありえないということを提出していたのだ。私の読みからすれば、辻仁成という作家は、それをなかなか巧妙にやってのけたように感じられる。「テロ」について書くことよりも、その「テロ」に重なって捉えることのできる自分の遭遇した出来事をデフォルメすることが重要であるということを、辻仁成は我々に伝えようとしていたようにみえる。

2002年2月7日 記